

7月刊 発売記念

覚書「文野はじめとの邂逅

一ノ瀬トヲル

私が初めて彼女に出会ったのは、遠くから微かな潮の香りがする、人気の無いバス停での事であった。その時私は、待合用のぼろいベンチに腰掛けながら、一人、本を読んでいた。後ろには古い市営アパートがあり、通りには申し訳程度の民家が建っていて、あちらこちらに空き地が散見される、そういう寂しい場所だった。

「はあ……」

ふとその時、溜息が聞こえた様な気がしたが、私は無視をした。

「はあ……」

溜息が再び聞こえてきた。先程よりも大きく、そして物憂げに。聞き間違いではなさそうだ。私は本から目を離し、隣を見た。女の子が一人、腰掛けていた。淡い黄色のスプリングコートに白いブラウス、赤いチェックのスカートといったいでたちだった。その子は両手で頭を抱えていて、ただ事ではない様子であった。いつの間に私の隣に座ったのだろう……。

「何か、ありましたか？」

私は心配になり、そつと声をかける。すると彼女は驚いて、顔を上げて言う。

「いえ、何でも無いんです。いえ、ちょっと、ホントに、何でも……」

「はあ……」

そこまで言われたら私もそれ以上は言及出来まい。私は本に目を戻す。

「コロツケさんが……」

彼女が呟いた。……どうも話を続けるようだ。

「コロツケさんが、売ってなかったんです……」

「……コロッケ？」思わず訊き返してしまう。

「そうなんです。この近くの商店街に有名なコロッケ屋さんがあって……私、それを食べに来たんです……」

私は思い出す。確か、駅前の商店街に繁盛している揚げ物屋があった。彼女はその事を言っているのだろう。彼女が続けて言う。

「でも、まだお店が開いてなくて……」

「いや……君、そりゃあそうだろう。だってまだ九時前だよ？開いたって、十時からじゃないのかな。場合によっては、十一時からってこともあるだろう」

「ああ、失敗しました！ 私、ショックです」そう言って彼女は両手に顔をうずめた。

私は軽く笑ってから、彼女に言う。

「そんな事、今時、携帯とかスマートフォンとかで調べれば、すぐに分かるでしょ。なのに、君は、何て言うか……中々チャレンジャーだね」

彼女が顔を上げ、眉間に皺を少し寄せて私をジッと睨んできた。

「いいんです、私は小説家ですから、これくらいアクティヴィティーなくらいがちようどいいんです」

「小説家……はは、嘘言っちゃあいけないよ」私は諭すように言う。見たところ、彼女はまだ十代後半と言ったところだ。

「嘘じゃありませんよ。そういうあなたは何なんですか？いい年した男の人が、こんな時間に……」むっとした顔で尋ねてくる彼女。

「火曜日が休みの人種なんだ、私は。そしてここで人を待ってる」そう言って笑いながら答える。

「人？バスじゃなくて？」彼女がバス停の時刻表を指差す。

「……バスは来ないよ。今まで来たのを見たことがない。きっと廃線してるんじゃないかな」

「へ？廃線、ですか……ふーん、で、人を待ってるんですか？」

「二年前に会った大切な人でね、それからずっと、初めて会ったこの場所で、時間がある時にこうやって、その人を待ち続けているんだ」

「二年前？え、ずっと待ってるんですか？」彼女が驚く。

「暇なときにね。気が向いたら」

どうして私は、この子にこんな話をしているのだろう。

「この本もね、その人が貸してくれたんだ」そう言って私は、彼女に革のカバーをかけた文庫本を見せる。

「その本を返したいんですね？」彼女がそう尋ねる。

「いや、この本の続きが知りたいんだよ。きっと続きがあるはずなんだ」

そう、私とあの人の時間はここで止まったままだった。いや、きっとあの人の時間は止まってないのだろう。私だけが、ここに置き去りにされている。新しく区切りを付けて動き出す、そういう一歩の勇気が持てなかったから。そして、あの人は私の下からどこかに行ってしまった。

彼女が私に体を寄せ、文庫本を覗きこもうとする。タイトルを知りたいのだろう。私はブックカバーを外して、彼女に表紙を見せてあげる。

「知らない、小説です……」

「君が知らないのも無理はない。古い小説だからね」私はそう答えてカバーをまたかけた。

「おーい、大丈夫かー！」

その時、私達二人の後ろから、大声が聞こえてきた。私達がそちらを振り向くと、学ラン姿の男子高校生が、アパート一階の一室に声をかけていた。その一室の窓が開き、中年の女性がその少年に応える。

「いつもいつも迎えに来てもらって済まないわね。今、すぐに行くから」

「いや、大丈夫です」そう言って学ラン姿の彼は敬礼のポーズを取ってみせた。

しばらくすると、一人の女の子が黒いセーラー服姿で、トボトボとアパートを出てきた。男の子が声をかける。

「大丈夫かよ。今日も調子悪いのか？」

男子学生が女子学生のカバンをさり気なく持ってあげていた。

「うん、大丈夫。今日は寝坊しただけ」

「あんま無理すんなよ。しんどかったら保健室行けよ」

「うん、ありがとう」目をこする女子学生。

二人組は私達の方へ歩いてくる。これから高校へ行くのだろうか。こんな時間だと、間違いない、一時限目は遅刻になるだろう。

二人は私達のいる待合の傍で立ち止まった。そして、信じられない事にバスがやってきた。私も隣の彼女も何も言えずに、バスが到着して、高校生二人が乗り込んで、去っていくのを、ただ見つめるだけだった。しばらくして、彼女が言った。

「バス、あるんじゃないですか」

「いや……そんな事は……だって何回もこの時間に来てたけど、今までバスが来た事は一度も……」

「時刻表を見間違えたか、ダイヤが変わったんじゃないですか？」そう言っただけで彼女は立ち上がり、時刻表を見に行く。

「嘘つきですね」彼女が振り向いて言った。

「君に言われたくはないな。小説家だって、似たようなものだろう」

「それは違います。小説は、確かにフィクションです。けれども、そこにある言葉の裏には、必ず真実が隠されているんです」

微かな笑みを浮かべて、彼女はそう答えた。

その、あけすけな物言い。その、自信に満ちた言葉。彼女は恐らく、自分の心の中にある物をストレートに表に出す事の出来る子だった。

内なる想いを、濁らせずに言葉に変換する。それは少年少女特有の、若さに寄り添ったいつときのはしかの様なものだった。そして今、私
がその病に罹ることはないのだろう。

「……続きを是非、書いてもらいたいね」

不意に、口をついて言葉が漏れた。彼女が一步近づいて、その赤い瞳で私をジッと見つめる。それから、首を傾げてこう言った。「続き……ですか？」

私は少し恥ずかしくなつて慌てて否定する。

「いや、何でもない。ちよつと君の書く小説に、興味が沸いてきたんだよ」

「お、やつと信じてくれましたね、いやー、えへへ、照れますねー」

そう言つて彼女は頭をかきながら、はにかむ。そんな彼女を見て、私は言う。

「どうだろう？一つ、君にコロッケでも奢ろうかと思ふんだけど……」

「ええっ？いいんですか！」彼女が声を上げる。

「君の作家人生へのささやかな先行投資つて奴だよ」

私は読みかけの（しかし既に何度も読み返している）擦り切れた古い本をパタンと閉じて、立ち上がった。

「これからゆつくりと向かえば、お店も開いているかもしれない」

「あ、ありがとうございます！」大仰に頭を下げる彼女。「で、でも、私、その……食べますよ、割と。本当にいいんでしょうか？」

彼女がおずおずと尋ねてくる。私は笑つて答える。

「大丈夫だよ。けれども、そうだな……そしたらその代わりに、私の話でも一つ聞いてもらおうかな」

「お話、ですか？良いですよ！私、人のお話つて大好きなんです！」そう答えて、彼女が先に歩き出す。

私は、彼女が何か、ゴシップやスキャンダルみたいな話だと勘違いしているような気もしたが、それを無視して尋ねた。

「そうだ、君の名前を聞いてなかった」

彼女が歩みを止めてこちらを振り向く。黄色いコートと赤いスカートが何処からともなく吹いてくる風に軽くはためいている。

「私、文野はじめて言います」

そして、彼女はニッコリと笑って、私達二人は街へ向かって歩き始めた。